チェルノブイリの子どもたち



チェルノブイリ子ども基金 NEWS No.89 2012 年 6 月 23 日発行 郵便振替口座 「チェルノブイリ子ども基金」 0 0 1 6 0 - 4 - 9 8 3 1 6

チェルノブイリ 26 周年救援キャンペーン

「チェルノブイリと福島」講演会

2012年4月22日(日) 明治大学リバティホール



チェルノブイリからの訴え ポホモワさんと娘オリガさん





1945年8月6日、9日、1986年4月26日、そして2011年3月11日。ベラルーシと日本、二つの違う国、違う文化をもつ二つの国ですが、一つの共通の悲劇と痛みがあります。悲しみは人々を結びつけます。それは私たちをも結びつけました。86年4月26日は、ベラルーシ人にとって、暗く悲しい日です。 チェルノブイリ原子力発電所の事故は、広大な地域に住む数百万の人々の運命を変えました。この頃のことを、自分の人生で最も大変な時期だと覚えています。それは、未知のものに対する恐怖があったというよりは、母親たちがみな、何よりも恐れているもの、それを前にしてはあらゆる世の中の問題が色あせてしまうものが、私の家を襲ったからです。私の娘オリガは7歳半でがんと診断されました。事故が起きたとき、私の双子の娘、オーリャとアレーシャは2歳半でした。ベラルーシの他の小さな子どもと同じように、幼稚園に行き、砂場で遊んでいました。このような恐ろしい悲劇が起きようとは、誰も考えていませんでした。

5月1日、ゴメリ市の住民はみなメーデーの行進に参加していました。私も子どもたちと一緒に参加しました。その後、私の両親の住んでいるロエフ(チェルノブイリ原発から80キロ)に行き、畑仕事を手伝っていました。その間、子どもたちはすでに汚染されていた土の上で遊んでいたのです。(ポホモワ・ワレンチーナさん3頁へ続く)

福島からの訴え 武藤類子さん(9、10頁に掲載) 富塚悠吏くん

電気が足りない。 足りているではありませんか? 火力だと電気代があがる。 命のほうが大切なのではないですか? 電気は必要だから仕方がない。 原子力に変わる電気を探しましょうよ。

富塚悠吏くん (小学5年生)

家族保養 5/5 ~ 5/16 (本分 13 ページ参照)



チェルノブイリ 2 6 周 年 救 援 キャンペーン 「**チェルノブイリと福島」講演会**〔報告〕 4/22 明治大学/バティホール

チェルノブイリ子ども基金にとって最も重要なイベント、4月の救援キャンペーンが今年も盛況のうちに終了しました。明治大学「現代史研究会」の全面的バックアップにより実現した広河隆一写真展は1週間にわたって開かれました。多くのボランティアのみなさまによって実現することができ、感謝申し上げます。昨年からは福島の原発震災を受けて、チェルノブイリ・福島救援イベントとなりました。今年も同様です。

(*キャンペーンの一環として、4・26には事務局長・佐々木真理が三重県津市でチェルノブイリ報告を行いました)

事故から1年の間、さまざまなことが起きました。 福島県および周辺の放射能汚染被災地では混迷の度 は悲しみと共に増すばかりです。そして、私たちが 長年支援してきた、チェルノブイリ被災地でも事故 後に生まれた子どもたちの健康被害が増えています。 チェルノブイリ、福島、どちらの被災者にも寄り 添いながら、できるだけの救援活動を今後も続けて まいります。

講演会はまず、「未来の福島こども基金」代表・ 黒部信一小児科医師の話から始まりました。

「第一に、本当は福島の高濃度汚染地から逃げてほしい、避難してほしい、避難という言葉は本当は間違いで、移住してほしい。もう二度と帰れない。それはチェルノブイリの現実の中で起きていることです。でも政府が決断しないので、内部被曝を避けるために、食品の放射能測定器を現地に贈り、市民測定所を運営してもらうことにしました(同封のチラシ参照)。どうしても移住できない人の内部被曝を避けるためには、次善の策として保養が必要です。現在は保養センター設立に向けて活動しています」

低線量被曝の8割は内部被曝が占めている、内部 被曝をいかにして避けるか、を中心とした話でした。 ======☆=====☆======

そして、メインゲスト、ベラルーシ・ゴメリのポホモワ・ワレンチーナさんと娘のオリガさんが登壇。 ポホモワさんはチェルノブイリ子ども基金のパートナーとして長年子どもたちを放射能から守るための活動を続けてきました。娘のオリガさんは子どものころ甲状腺手術を受けています。昨年から今年にか けて、チェルノブイリ被災地から、またドイツ、フランスをはじめとしたヨーロッパからも医師・科学者などの専門家が日本を訪れ、チェルノブイリの教訓を伝えるために各地で講演しました。でも、現地のお母さん、甲状腺の手術をしたかつての子ども、そういった立場の人の生(なま)の声を聞く機会はそうなかったのではないでしょうか? 貴重な機会だったと思います。スケジュールの都合で、東京と福島県白河市の2か所だけの講演でした。白河の主催者からの報告もあわせてお読み下さい(12頁に掲載)。

続いて、福島の被災地から武藤類子さんの話。武藤さんのことは「9.19 さようなら原発5万人集会」の感動的なスピーチでご存知の方も多いでしょう。

======☆=======

「昨年暮れに、野田首相の収束宣言があり、福島の 事故は各地で風化のきざしが見え始めています。し かし何ひとつ終っていない…それが私たち福島に住 む者の思いです」(10、11 頁に講演録を掲載)。

そのあと、10歳の富塚悠東君が登場。5分足らずのスピーチでしたが、会場の大人に単純明快な「原発いらない」の気持ちを伝えました。チャーミングな笑顔も印象的でした(表紙と12頁に掲載)。

最後が広河隆一さんの「チェルノブイリと福島 救援を考える」と題したスライド講演。昨年11月 に同じ明大リバティーホールで開かれた「チェルノ ブイリと福島」講演会では、3・11事故当時に私た ちは何をすべきだったのかと問いかけました。特に 専門家やメディアの役割について鋭く言及していま した(基金ニュース No. 87に講演録を掲載)。そして、 「私たちは"疎開"ということに、思いっきり持っ ている力を出して、いろいろなところに圧力をかけ ながらも、自分たちができることをしなければなら ない」と話を締めくくっています。

今年は具体的に、子どもたちを疎開・保養させる 施設を沖縄・久米島に作っているという希望のある 話でした。(同封の沖縄・球美の里チラシを参照)。

※広河さん、黒部さんほかのみなさんの講演録全文は当基金 サイトに掲載しますのでご覧ください。プレトしたものが必要な方 は事務局まで問い合わせてください。(文責・向井)

「困難の中の子どもたちへ希望を」 代表 ポホモワ・ワレンチーナ

(1頁からの続き)強い風が吹きました。畑仕事 を初めて3時間後、夫は気分が悪くなり鼻血がで ました。私はひどく頭が痛くなりました。当時病 院で働いていた私の母は職場に呼び出されまし た。1時間後戻ってきた母の表情を見て、何か恐 ろしいことが起きたとわかりました。その日の夜 ゴメリに戻ると、マスコミがチェルノブイリ事故につ いて伝えていました。情報は全く十分ではありま せんでした。事故の大きさは明らかになっておら ず、放射能の人への影響についての説明もありま せんでした。住民の安全に関する基本的な規則が 検討されたり発表されたりしていませんでした。 ただひとつ言われていたことは、外にいる時間を 短くすること、頭を覆う帽子などを被ること、ち ゃんとシャワーを浴びる、手を洗うなど、衛生面 に気をつけること、ということでした。幼稚園や 学校では子どもの戸外での活動を最小限に抑え ました。放射線測定器が売られるようになりまし た。これが多くの家族にとって、恐ろしく困難な 日々の始まりでした。5月の半ば、当時私が働い ていた職場から、母親と子どもたちはロシアのボ ルグラードの町にあるサナトリウムへ送られました。 私たちと一緒にゴメリ中の企業からたくさんの 家族が行きました。私と子どもたちは3ヶ月半ゴ メリから避難していました。戻ってきたのは、学 校の新学期が始まる 9/1 の前でした。

事故後の生活」避難先から戻った私たちの生活は、大きく変わることはありませんでした。放射能は洋服の汚れのように取ることができません。唯一つ出来る方法は逃げること、そしてできるだけ遠いところへ逃げることです。でも多くの他の家族と同じように、私たちの家族はどこにも

逃げるところはありませんでした。最大限、健康に注意をして、森のイチゴやキノコ、川魚、しぼりたての牛乳を飲まない、そして比較的きれいな地区の製品を食べるようにすることができるだけでした。食品を買うための補助金や、ゴメリの町の店で汚染のない食品等、全くありませんでした。私たちは健康に気をつけることを、新たにいちから学ぶ必要がありました。でもそれは理論から学んだのではなく、すぐに実践に移ったのです。それはまるで恐ろしいサバイバンショーのようでした。そして実際、より強い者たちが生き残りました。

子どもたちや自分たち、それぞれの両親に何か起こりはしないか、という不安を抱えながら暮らしてきました。年に2回、子どもたちをゴメリから、ロシアやラトビアなどの汚染のない地域に連れて行きました。当時働いていた職場が保養券を支給しました。チェルノブイリ事故後、ベラルーシの国土の23%が汚染されました。そこにはおよそ50万人が住んでいました。チェルノブイリゾーンからは、多くの住民がゴメリ市とミンスク市に避難しました。ベラルーシ北部や、ロシアや、バルト海地方の国に自ら行った人も多くいました。避難といいますが、それは村、町、市がなくなっていく感じでした。それらはベラルーシの地図から姿を消していきました。

娘の病気 事故後、娘たち、特にオリガが病気がちになりました。90年、学校での健康診断のとき、オリガの甲状腺にしこりがみつかりました。



双子のオリガとアレーシャ

彼女の健康に対して、私 はより深刻に考え始め るようになりました。娘 の体重が落ちて、学校か ら帰ってくるととても 疲れた様子で横になりたがりました。娘は定期的 に血液検査を受けていましたが、私はとても心配 でした。91年2月、娘たちを連れて行っていた ロシアのサナトリウムでたまたま知り合った医師は、 オリガの異常にすぐ気付き、早く甲状腺の検査を 受けたほうがよいと言いました。超音波検査を受 けた翌日、オリガは救急車でミンスク市の病院に 運ばれました。さらにその翌日(4/12)、手術が行 われました。娘の診断について質問をすると、医 師はすぐに「リンパ節に転移を伴う甲状腺がんで す」と答えました。私はひどくショックを受け、 意識を失いました。手術後、娘の健康と生命を心 配する日々が始まりました。私はミンスクでオリ ガと一緒にいる間、病名について誰にも本当のこ とを話さず、すべて秘密にしていました。娘のや つれた顔、注射跡で傷だらけのやせ細った腕、彼 女の喉に入っていた蛇のようなチューブ、それらを 見ていた時、こう思いました。もし娘が回復した ら、病気の子どもを抱えた母親が今後ひとりぼっ ちで悲しむことのないように、何かをしたいと。 少しでも子どもの苦しみを軽減するため、両親に 支援と希望を与えるために、あらゆる努力をしよ うと決めました。だって私はそのとき、誰も頼る 人がいなくて、世界でたったひとりぼっちのよう に感じていたからです。オリガは、ベラルーシで初 めて甲状腺がんの手術を受けた子どもの一人だ ったのです。

整善団体の設立 とても辛かったのですが、何もせずにはいられなかったのです。地元のテレビ番組で自分の悲劇を話し、視聴者に対して、子どもたちの健康に気をつけてほしいと訴え、早い時期に検査を受け、超音波検査を受けることをすすめました。放送が終わるとすぐに、私のところに親たちが連絡してきました。ガンの手術や治療

を受けた子どもをもつ親たちや、そうでなくても 心配している親たちでした。92年4月26日、ガンの病気の子どもとその親たちを支える団体を 設立しました。その時、団体にはすでに160家族 が所属していました。全員が甲状腺ガンの子ども でした。全体として、甲状腺がん患者の数は90 年から急激に増えました。ピークは95年です。これは統計に表れています。私たちの団体のデータからもそのようにいえます。

私たちの団体のスタッフは、病気の子どもをも つ母親たちです。医師、カウンセラーたちも支えて くれています。ガン、血液病その他の病気の子ど もをもつ家族への援助が大事な課題です。自分の 経験から、入院中や退院後の子どもには、医薬品、 ビタミン剤、果物、質の良い食品を買うために、 多くのお金がかかること、そして汚染のない地域 での保養は、子どもたちの健康回復にとって最初 のステップになると私は知っていました。経済的、 法律的、精神的、その他のどのような援助もする 努力をしています。団体には国からの援助はあり ません。寄付金だけによって成り立っています。 町のいくつかの企業、外国の NGO の協力のおかげ で医薬品やビタミン剤、おしめ、他にも子どもが ちゃんと生きていくためのたくさんのものを家 族に援助することができます。

命を落とした子どもたち 団体を設立してから の 20 年間で、亡くなった子どもは 154 人です。 こどもたちは明るく、才能があり、十分楽しむことができなかった人生を愛していました。その中の、3 人のこどもについてお話します。

ヴィーカ・Kは、1歳で腹膜後腔の神経芽細胞腫と診断されました。その後、骨髄に転移しました。短い人生のほとんど3分の1を病院で過ごしました。手術、抗がん剤治療、薬。この子は小さ

い時から他の生活を知りませんでしたが、知的好 奇心のある明るい子どもでした。2011年に亡く なりました。

イリヤ・V (2004 年生まれ)。 2歳半の時、肝臓にガンが発見 されました。長い間抗がん剤治 療を受け、胆のうを切除しまし

た。その他、性的早熟がみとめられました。実際 には4歳であるのに対し、9歳から10歳でした。 2008年11月と12月の短い期間を、イリヤは家 で過ごしていました。しかし、新年まであと2 日というとき、再発がみとめられました。2009 年1月、楽しいお祝いと引き換えに、彼は病院に いました。2月3日、新たな抗がん剤治療が始ま りました。イリヤは母親と祖母と一緒に暮らして いました。両親は離婚。父親は経済的にも精神的 にも家族を支えてはくれませんでした。母親は教 師の仕事をしていましたが、息子の病気のために 働くことができなくなり、子どもの介護手当と祖 母の援助で暮らしていました。イリヤは4歳では あっても、自分が母親と祖母を守らなければなら ない唯一の人間だということを、わかっていまし た。母と祖母の方も彼の想いを汲んでやり、この 無力で同時に強い女性たちは夜にだけひそかに 涙を流したのです。残念ながら、定期の抗がん剤 治療の最中、病院で、母の腕の中で亡くなりまし た。

パーヴェル・S (1989 年に生まれ) は側頭骨のガンと診断されました。手術の後遺症で言語に障がいが残り、同年代の者との交流に影響を及ぼしました。しかし前向きな、機械に夢中な少年でした。残念ながら、健康上の理由で勉強を続けることはできませんでした。コンピュータゲームが息抜きとなっていきました。それは、現実世界で人と

の交流が足りないことへの穴埋めでした。パーヴェルにとってサナトリウム「希望」に行ったことは、大きな喜びでした。そこでだけは、同年代の仲間の中で、自分の居場所があると感じ、病気が人生にとって障がいとはならないもしれない、と感じたのです。彼の人生で最後の年、大脳にたくさんの腫瘍がみつかり、2008年9月に亡くなりました。

パーヴェル、イリヤ、アレクセイ、ヴィーカ、アンドレイ、 タマーラ、これらの名前は、誰かにとってはただの 名前にすぎないものですが、私たちにとってはお さまることのない痛みなのです。子どもたちの病 気、これは、チェルノブイリ事故の後にベラルーシの 人々を襲った、一番大きな悲しみです。恐ろしい ガンの診断、病院のベッドで過ごす何ヶ月、とき には何年にもなる年月、いつまでも終わらない薬 の服用、後遺症、これがそれぞれの子どもたちの 辛い現実です。健康を回復するまで10年、15年 かかることもあります。子どもを失った親の痛み や悲しみ、このようなことがもう四半世紀続いて います。まるでこの被害に終わりがないかのよう に感じます。現在、団体には373人の障害児の会 員がいます。そのうち 212 人が 17 歳までの子ど も、さらにそのうちの50人の子どもは、その親 たち自身が、以前団体の会員でした。161人は、 18 歳以上の人たちです。腫瘍病の人、甲状腺が んの手術を受け、自分の子どもが病気の人などが います。

病気の子どもたち 私たちの団体に所属している 0~17 歳の子どもたちの病気の内訳です。 「白血病 47 名、脳腫瘍 33 名、甲状腺がん 22 名、小骨盤の腫瘍 22 名、目の腫瘍 20 名、腎臓がん 18 名、肝臓がん 16 名、鼻咽頭のがん 8 名、鼻咽頭のがん 4 名 (2011 年~2012 年初)」。国が発表

している統計は、もちろんこれとは違います。こ れは、今団体に所属している子どもの人数ですの で、以前の会員の人数も入れたら、もっと多くな ります。障がいのある若い親たちは、病気が自分 の子どもたちにまで現れてしまったことに深く 傷ついています。心の苦しみをすべて説明するの は辛いものです。私たちは彼らの子どもたちを "孫たち"と優しく呼んでいます。でもそのあた たかい言葉の響きとは裏腹に、心は冷たくなるの です。長い間かけて病気の子どもを健康回復に導 くには、両親には忍耐力と心の支えが必要です。 残念ですが父親の中には、病気の子どもを育てる ことへの責任を恐れたり、あるいは単に障がいの ある子どもを育てたくない、などの理由から、家 族を捨ててしまう人も見られます。その場合、す べての責任が母親にかかってくるわけです。私た ちの団体は、そのような家族を、特に援助をする ようにしています。

サナトリウム「希望」は、ガン患者のこどもたちの健康回復にとって最も適したところです。手術や治療後の健康回復ができるだけでなく、心を安らげることができるのです。このような子どもたちにはとても大事なことです。ここでは髪の毛のないことや、手術の傷跡、病気の他の多くの後遺症を恥ずかしがることなく過ごせます。自分だけでなく、同じような経験をした人がいることを知るのです。精神的により強くなる子や、病気になったにもかかわらず「自分」というものを失わず、さらに成長していく強さを自分の中に見つけたことに、誇りをもつようになる子もいます。

オリガ・M (1987年生まれ) は17歳の時に甲 状腺がんと診断。手術・治療後、深刻なうつ状態 になりました。何にも興味を示さず、以前の明る い彼女は、悲しい目をするようになりました。チ エルノブイリ子ども基金のおかげで、彼女はサナトリウム「希望」に行きました。両親は心の悩みを克服するのは難しいだろうと思っていました。しかしサナトリウムで医者や仲間たちと交流すると、彼女は変わりました。将来の計画をもつようになり、今後も生き続けたい、日々を楽しみたいと考えるようになったのです。2005年に医科大学に入学し、現在はインターンです。趣味は登山とダンスです。このかわいい女の子の目を見ると、どんなことがあっても立ち向かわなければならない、と強く確信するようになります。彼らのため、つまり、私たちの子どもたちのため、将来のために立ち向かわなければならないという気持ちになります。

| 母親となった女性たち | イリーナ・P(1977 年生まれ)は15歳の時に甲状腺がんと診断され、 私たちの団体の会員になりました。他の子どもた ちと同じく、彼女の健康への道はとても長いもの でした。手術、治療、生涯服用するホルモン剤、 これが彼女の現実です。イリーナは自分の将来に 不安を抱きました。結婚をしていましたが、長い 間子どもをもつことを決心しませんでした。しか しとても子どもを望んでいました。イリーナは 31歳で女の子を出産しました。赤ちゃんの背中 の皮膚に巨大な黒いあざがありました。彼女は絶 望しました。娘の健康はどうなるのかという、恐 ろしさを感じました。幸いなことにイリーナは諦 めることなく、自分が少女だったころに自らの健 康回復を信じたように、今は自分の子どもが健康 になることを信じています。

イリーナ・M (1985 年生まれ) は 11 歳で甲状腺がんの手術を受けました。ガンは両方の肺に転移、放射性ヨード治療を何度も受けました。2003年に娘クリスチーナを出産。先天性の遺伝子変異

がありました。よく病気にかかり、心臓の問題も あります。イリーナにとって自分の病気の後遺症 と闘うことも大変なことですが、もっと辛いこと は、彼女のただ一人の娘にまで、さらに悲しい運 命が用意されていた、という事実を受け止めなけ ればならないことです。

国家プロジェクト 現在、国家は障害児年金を 支給したり、障害者特典を提供したりしています。 しかし、特典の項目は毎年少なくなっていて、い まではそれは障害のある子どもの生活に大きな 役割を果たしていません。2009年のそれと比べ ると、当時はまだどんな薬も無料でしたし、交通 費も無料でした。住宅の取得や他にも特典があり ました。今残っている特典には制限が設けられた り、多くはまったく廃止されたりもしています。 経済危機のために、これらが廃止されることはあ りうると思います。しかし年金や補助金のかなり の部分が、いまは薬、交通費、住宅費などの支払 いに使われているのです。子どもたちには実際に、 手厚い補償が必要です。その必要性は年々さらに 高まっています。チェルノブイリ事故による汚染地 域に住んでいる子どもたちの保養も、国家プロジ ェクトの重要なものひとつです。汚染地に住んで いる子どもたちは1年に一度ベラルーシ国内のサナ トリウムに保養に行くことができます。ゴメリ州 の国立衛生管理機関により、住民の体内放射能検 査が行われています。結果により、体内のセシウ ム137 の量がわかります。また、ベラルーシの各 州では食品の検査が行なわれています。

これらの国の措置にもかかわらず、子どもや大 人がよく病気になるのは、私たちが汚染された土 地に住んでいること、常に汚染された空気を吸い 込み、きれいとは言えない水を飲み、汚染された 土壌で作られた食べものを食べていることと、明 確に関連があります。村に住んでいる人、または畑を持っている人たち、こういう人たちが大多数なのですが、その多くは、自分で作ったものを食べています。彼らの食べ物は検査されていません。もしかしたら、その放射能の値は低いかもしれません。でもどちらにしても放射能はあり、子どもは生まれた時から、常にそれを食べ続けているのです。汚染地域に住んでいる住民が常に浴び続けている低線量の放射能は、遺伝子の損傷を引き起こし次の世代に伝えられる、と言っている学者もいます。四半世紀以上が過ぎてもなお、チェルノブイリ事故の影響はあります。病気の発症率の高さは、今後もさらに影響が続くことを思わせます。

希望をもって生きる このような状況ではあっても、私たちは将来への希望をもって生きています。私たちは、悲劇に慣れてしまっているだけではなく、その悲劇が私たちにもたらした、そして今ももたらしている困難に粘り強く耐えることを学びました。残念ながら、いつも奇跡が起きるとは限りません。でも私は一人の母親として申し上げたい。決してあきらめないで、絶望しないでください。あなたの親しい人たちの命と幸せのために、最後まで根気強く闘ってほしいと思います。ものごとがよくなっていくと信じることで、絶望から逃れることができるのです。これは自分の個人的な経験から、はっきりと申し上げることができます。

私はこれまで通り、チェルノブイリの被害者たちを支援する仕事を続けます。大変な仕事ですが、いろいろ苦労はあっても、その代わりに、喜びの涙や母親たちからの感謝をもらっています。ガンの子どもとその家族を救いたいという思いにおいて、私は孤立無援ではないと考えています。みなさんのあらゆる支援に感謝しています。そして、

困難の中にある子どもたちに希望を与えていき たいと思います。今日、私の娘オリガが隣にいる ことを幸せに思います。娘を病気から引き離すこ とが私の願いでした。この思いと、親切な人々の 援助のおかげで、彼女は生き延びることができま した。

~*~*~*~*~*~*~* オリガ・ゼレンケヴィチ (1983 年生まれ)

チェルノブイリ事故後、私は体調が悪くなりまし た。経験不足と必要な医療機器がなかったことに より、医師たちはすぐに正しい診断ができません でした。3年後、甲状腺がんと診断されました。 両親はそのことを私に長い間話しませんでした。 医師の部屋から出てきた母が泣いていたことを よく覚えています。自分が母親となる年齢になっ た今、こんな恐ろしい診断を聞かされたことがど んなに辛かったかわかります。自分の子どもの病 気の原因が、恐ろしい原子力事故であるなんて。 手術後1ヶ月間入院しました。その時からチロキ シンという薬を飲むようになりました。これは人 工的な甲状腺ホルモンで、生涯飲み続けなければ なりません。また、手術後に肺に転移のあること がわかりました。その年、他の子どもたちと一緒 にドイツに治療に行き、放射性ヨート治療を受けま した。体調はよくなりませんでした。よく意識を 失ったり、頭痛が起きたり、手足のひどい痙攣が 起きたりしました。肉体的にも精神的にもとても 辛かったです。同年代の子たちは走ったり元気に 遊んだりしているのに、私には何も許されません でした。当時の私は本当の病名も知りませんでし た。知っていたことは、手術や治療を受け薬を飲 んでいれば、早く病気から解放される、というこ とだけでした。私は辛抱強くこの「解放」を待ち ました。次の2年間は、自国やイタリアで頻繁に

検査を受けました。93年にイタリアで2回目の手 術を受け、甲状腺を完全に切除しました。毎年放 射性ヨード治療を受けました。それは放射性ヨード を飲み、その後、7~10日間かけて体の中から出 されるものです。その間、他の人から隔離された 部屋にいて、できるだけたくさん水分をとらなけ ればなりませんでした。徐々に慣れていきました が、子どもの私にはとても恐ろしいものでした。 この治療は安全なものではありません。治療後3 ~5年間、女性はできるだけ妊娠をしてはいけな いのです。残念ですが、将来の子どもたちへの健 康に対する恐怖というものは、私の世代の多くの 女性に特有なものです。手術と検査などにより、 私はよく学校を休まなければなりませんでした。 先生はいつも休んだ分の勉強をみてくれました。

チェルノブイリ事故と関連のある私のような病 気の子どもたちは、私の国にたくさんいます。事 実上、全員が様々なレベルの余病を併発していま す。私と一緒に治療を受けたり、手術を受けた何 人かの子どもは、もうこの世にいません。私は視 力がだんだん低下し、眼鏡をかけるようになりま した。心臓に問題も起き始めました。頭痛は常に ありました。一方で、勉強に努力していました。 オーケストラで民族楽器の演奏もしていました。私 はなにごとにも模範的であろうと努めました。そ うすれば両親を喜ばせ、元気づけることができる のではないかと思ったからです。両親がどんなに 私を救おうとしてくれていたか、私にはわかって いました。両親は私の回復のために、文字通り戦 ってくれました。そして私はいつも、両親が自分 のためにしてくれたすべてのことに感謝してい ます。辛い時期に色々なことに一生懸命取り組ん だことはよかったと思います。それによって悲し い気持ちを忘れることができたからです。音楽と

創作活動により、前向きに生きることができました。学校を卒業後、大学の経済学部に入学、2006年に卒業しました。健康の問題で長い間就職することができませんでした。その後、会計の仕事に就きました。その職場では労働者の半分以上が障害者でした。今は、税検査機関で主任国税監査官として働いています。仕事は大変で責任も重い一方、給料はよくありません。視力は低下し、毎日頭痛があり、特に心臓の問題を一番心配しています。他の仕事に変わりたいですが、残念ながら国の経済的な問題から、良い仕事を探すのはとても難しいことです。

原発事故被災者への社会保障計画は4年前に 廃止されました。私はこの計画による特典を受け ることに間に合い、特典付きの融資を受けアパートの小さい部屋を得ることができました。交通費 の無料、多くの医薬品に対する特典、有給休暇の 追加などの特典もなくなりました。サナトリウムで の保養プログラムも縮小されました。私はもう4 年以上、保養に行っていません。自分で保養券を 買う経済的余裕はありません。

私の人生は、病気によってその前と後に分けられたようなものでした。薬や病院、これらの苦しい体験のない人生を想像できません。これらはみな、私を精神的に強くしました。私はいつもできるだけ人のためになることをしようと努めています。人の痛みや辛さを自分のことのように感じます。私は気落ちしてはいません。素晴らしい未来を信じています。

夫のアレクサンドルとは大学生の時に知り合いました。私たちは強い信頼関係で結ばれています。もちろん彼は、私の病気のことを全て知っています。母は何度も彼の両親と話をしました。私の病気のことはもう秘密ではありません。結婚式では

たくさんの贈り物、お祝いの言葉を一番親しい人 たちからもらいました。私たちは、みんなには内 緒で、こんなことを願いました。「末長く一緒に



暮らし、子どもの誕生を喜び、 孫たちの世話も手伝いましょ う」と。 私は若い母親たちを うらやましいと思います。これ はあたたかい気持ちからです。 近いうちに私も、夫に元気な子 どもを見せてあげたいと思っ ています。

日本で原発事故が起きたと知った時、みなさんのすべての痛み、悲しみを、自分のことのように感じました。大きな衝撃を受け、みなさんをとても心配しました。もう世界で二度とこのような恐ろしい原発事故が起きないことを、病気の子どもが少なくなることを強く願います。子どもたちの涙を見ることは本当の悲劇なのですから。

日本の若い人たちと全ての皆さんに、絶望しな いように望みます。いつもお互い助け合い、心を 強くもち、素晴らしい未来を信じること、そして 大事なのは健康であることです。健康と、前向き な気持ちを持ち続けるのは大変なことです。私は 検査された汚染のない食品を選ぶようにしてい ます。私たちの体には、空気からではなく、多く が水と食べ物から入ってくるからです。一方で、 きれいで新鮮な空気も必要です。できるだけ汚染 地域からきれいなところへ行くことは大切です。 そこでは疲れや頭痛がすぐに解消されます。もち ろん、病院での定期検査は欠かせません。早く病 気が発見されればすぐに治療に入ることができ、 深刻な状況から免れます。みなさんと、ご家族の みなさんが、どうか強い心と前向きな気持ちで過 ごされますように。 (翻訳:佐々木真理)

何一つ終わっていない〜福島に住む者の思い 武藤 類子

遅い春がようやくめぐり私の住んでいる町は、 桜がほころび始めました。昨年の3月11日から 1年間、すべてが変ってしまった世界を激流に流 されながら必死で生きて来たように思います。

今年の3~4月にかけて、再び地震が頻発しています。福島原発4号機の崩壊をだれもが恐れています。車のガソリンを満タンにし、避難用品の準備をしています。しかし時々「何という状況の中に暮らしているのだろう」と言う思いがおそって来ます。

町のあちこちに放射線を測るふしぎな形のモニタリングポストが設置されました。昨日の朝、郡山駅東口の線量は、0.998 µ sv/h でした。ホットスポットが町のいたるところに潜んでいます。郡山市には、ある日巨大な屋内遊戯場ができました。中には、ブランコやすべり台、砂場などがあります。車で連れて来られる子どもたちが楽しそうに遊んでいます。しかし太陽の光も涼やかな風も、ひろって遊ぶドングリや落葉もそこにはありません。まるで SF のような光景が日常の中にとけこみつつあります。

そのような中で、国は、それがまるで唯一の被 曝低減の対策であるかのように、除染に莫大なお 金を投入しています。業者や市民ボランティアが 除染をしていますが、その方法は手さぐりです。



一旦下がった線量がまた上がってしまったり、 放射性物質が移動するだけだったり思わしい効果はありません。放射能が人類の手には、なかな か負えるものではないことがかいまみえます。業 者の下請け作業員は、簡単なマスクと手袋しか支 給されず、市民にいたっては自ら気をつけるしか ありません。南相馬市やいわき市などでは除染ビ ジネスや事故処理に関わる人であふれ返り、常に 旅館やホテルは満ぱい、歓楽街がにぎわっていま す。除染をして、避難していった人々を呼び戻し、 福島を復興するというのが福島県の方針のよう ですが、私にはうつろにしか聞こえません。

そして4月になり、郡山市は突然学校における 屋外活動の制限を解除しました。教員や親たちは とまどっています。また幼児までが参加するマラ ソン大会が、計画されています。春休みには、栃 木県の中学生が、いわき市のガレキの片付けのボ ランティアに来たとテレビのニュースが伝えて いました。給食の産地偽装事件もありました。安 全キャンペーンは姿や規模を変えていろいろな ところに潜り込み続けられています。農水省は独 自に厳しい基準を設けているスーパーなどに対 し過剰な規制は混乱のもとになると暗に圧力を かけています。

人々は翻弄され、疲れ果て、やがて放射能への 警戒を手ばなしていきます。何も聞きたくないと 耳をふさぎます。人々の分断は深まるばかりです。 このような政治的思惑の一番の犠牲になるのは、 あらゆる権利の外に在る子どもたちです。私たち はほんとうに心配です。最優先で子どもたちの被 曝の軽減を考えなければなりません。民間の団体 による避難や保養の計画がたくさん作られ支援 の手がさしのべられていますが、国や福島県は支 援しようとはしていません。市民の力こそが子ど もたちを守るのだと感じています。しかし、つい 最近、伊達市が新潟県の見附市の学校に「移動教室」を決めました。わずか2泊3日だそうですが、ようやく自治体も子どもたちを汚染地に置くことについて考え始めたのでしょう。すでに、福島市から米沢市へ毎日移動保育を独自で行っている保育園もあります。

この度、「未来の福島こども基金」「DAYS 被災 児童支援募金」の広河さん達のご提案で、沖縄に 設立されようとしている保養施設は、ほんとうに 待ち望まれているものだと思います。たくさんの 方のご協力を切に望みます。今後福島の自治体を いかに動かしていくかが私たちの課題です。

先月、私は韓国のハプチョンという町へ行きました。広島で被ばくした在日韓国人の人々が、自国に戻り、たくさん住んでおられる町です。そこで世界の被ばく者証言集会が行われました。ヒロシマ、ナガサキ、台湾、ビキニ、チェルノブイリ、そしてハプチョンの人々が証言し、私は福島からの証言をさせていただきました。その中で、チェルノブイリ原発から 180km のノヴォズィプコフという町から来られた男性がその地の実情とともに 26 年間のさまざまな取り組みについて話して下さいました。その中でも子どもたちの健康被害、保養キャンプの必要性と甲状腺検診室設立などの医療サービスのお話が、印象的でした。

私たちはチェルノブイリの事故を知っていたにもかかわらず、福島の事故をまねく事態となってしまいましたが、チェルノブイリの事故後の取り組みをもっと学び参考にしていく必要があると思います。福島県内には「DAYS 放射能測定器支援募金」、「未来の福島こども基金」から食品測定器やホールボディカウンターがいち早く寄贈され、市民の測定所ができました。その後、どんどん増え、県内に現在15か所設立されています。ようやく行政も公民館などに設置し始

めました。

また、私たちは原発事故被害者の支援に関する 法制化についても被害者の立場から意見を出し 続けていかなければならないと考えています。現 在与野党での審議がなされていますが、ヒロシマ、 ナガサキでの被爆者援護法が、被害を受けながら、 そこからもれてしまう人々をたくさん生み、その ための裁判が未だに続いていることを思うと、全 ての被害者が救済される法にしていかなければ と思います。また子どもたちが原告となり、安全 な場所で教育を受ける権利を求めた「集団疎開裁 判」も続いています。ご注目ください。

そしてもうひとつ取り組み始めたことがあり ます。3月に「福島原発告訴団」というものを作 りました。今回告訴は東京電力や国の原子力安全 委員会、安全保安院、そして被害を拡大し続けて いる学者たちを刑事事件として、きちんと捜査し てほしいと検察庁に訴えます。この一年私たちは 東京電力のあまりの無責任ぶり、この国のありよ うに本当にがっかりし、怒りを感じています。こ の事故の原因はどこにあるのか、責任はだれにあ るのかをあきらかにしなければ本当の復興など はないと思っています。福島原発事故は最悪の事 故ではありましたが、これをひとつのチャンスに かえて、新しい世界を創っていかなければなりま せん。若い人や子どもたちに核を残し、膨大なゴ ミと汚染された大地を押しつけ、生涯健康被害へ の恐れを抱かせてしまっている大人たちが追求 しなければならないのです。

また分断がすすむ福島の人々がこの告訴を成 し遂げることにより気持ちをひとつにできた



ら良いなと思っています。できることをひとつずつ、手をとり合いながらやっていくことが新しい世界を創っていくことだと思っています。ご一緒に歩んでいきましょう。

チェルノブイリ被曝者を迎えて〔報告〕

小渕 真理

アウシュヴィッツ平和博物館9周年の集いとし て4月23日に白河市の図書館において「チェル/ ブイリ被曝者を迎えて~放射能被害を最小限に抑 えるためのベラルーシからの提言」と題し講演会 を開催した。チェル/ブイリ原発事故で被曝され たポホモワワレンチーナさんと娘のオリガさん にお越しいただいた。お二人はチェルノブイリ子 ども基金の招きで来日し、明治大学で講演された。 放射線量の高い福島を気にかけながらも、被曝し て不安の最中にある私たちにご自分たちの体験や 活動を語ることで勇気と希望を与えてくれた。と りわけ、娘のオリガさんは7歳の時に甲状腺の手 術をし、現在も体調を気にしながら仕事をしてい るが幸せな結婚もし、『早くかわいい赤ちゃんを 夫に見せたい』と言っていた。本当に素晴らしい 生き方だと思う。

26年間の被曝者としての 生活は想像するに余りある が、不安、恐怖、絶望の渕 から立ち上がり病気の子ど もと親を支える団体「困難 の中の子どもたちへ希望 を」を設立し活動を続けて いる。現実を見据え、たじ ろがず未来を信じて行動す るお母さんのポホモワさん の姿は母性そのものだ。たとえ障害のある子ども が生れても、生み育てるのだという確信が全身に みなぎっていて頭が下がる。福島はこれからだ。 参加されていたお母さんが新白河駅まで花束を持 って追っかけてきた。『本当によかったです。頭 の中がもやもやしていたけれど、何か道すじが開 けそうな気がします。ありがとうございました』 と語りかけた。体験者の生の声はすごい。

日本は唯一の被爆国だ。第五福竜丸事件もあった。しかし何も学ぶことなく原発大国になった。 原発とは何か?今まで無関心だった大多数の市民 にも責任はあると思う。これからどうすればよい のか、何をするべきかを考え行動しなければなら ない。節電だけでなく豊かで便利な生活を見直す 必要もあると思う。自然と向き合いながら、一人 ひとりが真剣に考えなければ次世代に地球をバト ンタッチできないだろう。

福島県民は事故から1年以上経つが、まだまだ 不安はつのりどうしたらよいか困惑している。い

> のちを生む女性のほうがプチ 鬱やぶらぶら病になっている ように見える。原発の終息も ありえないが歩き出さなけれ ばならない。チェル/ブイリ の教訓から学び、支えあって 生きていこう。

> ワンモア FUKUSHIMA がど こかで起こらないことを願い ながら。



COMPANY OF THE PROPERTY OF THE

日本の未来を。 力して政府に頼らず、みんなで守りましょう。

るります。 みなさんは日本の未来をどう思いす

ら成長していく僕たちは十数年後には社会人には子力村より安心して福島の人が暮らせる村原子力村より安心して福島の人が暮らせる村原子力村より安心して福島の人が暮らせる村

ではないですか? 電気は必要だから仕方がない。原子力に代のではないですか? のではないですか?

電気が足りない。足りているではありませんなんででしょうか? 意味がわかりません。をしようとしています。

しかし、政府などは原発を早~早~と再稼働停止しようとしています。もうすぐ5月5日の子どもの日に、原発が全機もうすぐ5月5日の子どもの日に、原発が全機

原発事故が起こり、僕とお母さんは時間をか2011年3月は最悪の月でした。

けて避難をしました。

現在の家に住んで1年が経ちます。

北電力のではなく……。 た。地震発生後、東京電力の原発事故です。東 僕は3・11 のとき、福島県郡山市にいまし

2012年6月 ベラルーシ チェルノスイリ被害者家族の保養

ベラルーシ ミンスク州 ビレイカ地区「希望 21」 期間:5/5~5/16 / 参加者:8 家族 18 人 (子ども 8人:3~8歳、大人10人:23~32歳) 滞在費:子ども8人×\$16.1×12日=\$1545

大人 10 人×\$18.5×12 日=\$2220 合計 3765 ドル

「希望21」で行われる家族の保養は、今年で5年目です。参加した母親7人と父親1人は、子どもの頃甲状腺の手術を受けた人たちです。彼らは今もホルモン剤の服用と定期検査が欠かせません。

甲状腺以外だけでなく、他の病気を患っている人もいます。また、8人の子どものうち、全く健康な子どもは一人だけでした。他の子どもたには次のような問題があります。気管支炎(6歳・女・ゴメリ市)、腎盂腎炎(8歳・女・ゴメリ市)、胸郭の変形、虚弱体質(3歳・男・ミンスク市)、甲状腺機能障害・性的発達の早熟(8歳・女・ミンスク市)、心臓欠損(4歳・男・ザス

ラヴリ市)。「たとえ病名はついてなくても、体が弱い、風邪をひきやすく治りにくい子どもが多いのです。そのような子どもたちにとってここでの保養は大変重要です」と、「希望21」の副所長・小児科医のイレーナは話します。

滞在中、参加者はそれぞれの健康状態に応じ、 マッサージ、水圧療法、歯科治療などを受けまし

た。また、子どものための 教室(ビーズ細工、絵画、 陶芸、折り紙)、親たちの ための教室(医療、心理、 教育に関するレクチャー 等)、親子で参加できる催 し物などに参加しました。 参加者たちはみな保養に大

満足でした。今回参加した母親のうち5人は、10代の頃「子ども基金」の招待によりこのセンター

で保養をしたことがありました。夫と息子と3人で参加したナターシャ(29歳)「きれいな空気、おいしい食事、優しい職員の人たちに大感激です。日本の人たちが長い間私たちを助けてくれることに心から感謝しています」

R・イワン (父親28歳)、ガリーナ (母親27歳)、アンドレイ (息子4歳) 二人とも甲状腺ガンの手術を受けており、子ども基金が開催した「甲状腺手術後の子どものための特別保養」に参

きっかけで結婚しました。 「私たち二人にとってここは 大切な場所。自分たちの子ど もと一緒に戻ってくることが できたのは、とても感慨深い です」家族保養の参加者たち

加。そこで知り合ったことが

です」家族保養の参加者たちは、グループで保養にやってくる子どもたちの宿泊棟とは別の、コテージに宿泊します。イワンとガリーナは、子ども

たちの昼寝の時間に、かつて

自分達が滞在した宿泊棟をのぞきに行きました。 「そこはとても懐かしいにおいがしました。子どもの頃の思い出が一気によみがえりました」とイワン。「私にとって子ども時代の一番楽しくて輝いている思い出は、この希望21で過ごした時間

です!」とガリーナ。

~~*~*~*~*~*~* ポホモワさんは講演 (3 頁参照) の中で こう話しました。「かつて私たちの団 体の会員だった若者たちは20歳を過ぎ ていて、自分自身が親になっています、 しかし病気はさらに彼ら自身に、また しばしば彼らの子どもたちにも影響を 及ぼしています。彼らの子どもの中に

は、深刻な病気の子もいます。多くの子どもが何らかの健康の問題があります。全体的に体が弱いのです」※ウクライナ・ベラルーシの病気の子どもたちのための保養の様子は次号で報告します。





チェルノブイリの歌声 ~救援イベント「チェルノブイリと福島」講会・写真展 来場者の声~

4/14-16「チェルノブイリと福島」写真展

◆報道がいかに重要か、恐怖さえ覚えた。(30代 女性)◆私 も小学生の娘がいるので、子どもの犠牲者には本当に胸が 痛くなります。これ以上の悲劇がくりかえされないよう肝 に命じていきたいと思います。(40代)◆あらためて、放射 能のおそろしさを知った。原発は、たとえ電気が共有でき なくなってしまってもやめるべきだと思った。電気よりも 人の命の方が大切。(10代 男性)◆広河氏の名前はよく聞い ていたが、実際の写真を見るのは初めてで、見れてよかっ たです。避難地域まではいって行ったりと、身体をはって の取材に敬意を感じました。視覚だとよくわかり、チェル ノブイリの子どもたちも福島の子どもたちも放射能から守 らなければと改めて思いました。(50代 女性)◆衝撃的で言 葉もありません。福島の10年後、20年後が本当に心配で す。家族の分断、人の心の分断、放射能、原発は全てを分 断させている。(30代女性)◆胸がいっぱいです。福島が 「プリピャチ」にならないためには、私たちも考え、行動 しなければ、と思います。 (70代 男性) ◆福島事故に、 広河さんがチェルノブイリ事故で撮影や調査をされた諸々 が必ず活きてくると思いますし、そのようにしなくてはな りません。何世代も放射能と生きていかなくてはならない のですから…。その事が悲しくもあります。私たちは、こ れ以上、核の悪事を働いてはなりません。それが今に生き る私たちの使命です。(50代 男性)◆少し前まで遠くの国で 起きた事故と思っていたが、去年は福島で起きた。チェル ノブイリは数年後の福島だと思う。また写真展をやってほ しい。(30代 男性)◆20km 圏内から避難している者です。広 河さん達の福島原発、国の原発の危険を国民に情報公開し て広めていただいていることに涙がでる思いです。東京に 避難している間だけでも、私に何ができるか、実行してい きたいと思います。(60代女性)◆大好きな福島、そしてそ の周辺のこれからがとても心配です。正確な現状を伝えら れるメディアがほとんどない中、このような写真展はとて もありがたいです。自分達で正しく見つめ、長い目で何か していければと思います。(30代女性)

4/22「チェルノブイリと福島」講演会

◆黒部氏の「避難ではなく移住を」「二度と帰れない」という言葉は、本来政府が発するべきものと考える。その上で支援すべきだ。 ゴメリでおこっていることは、これから病気の

子どもが沢山生まれるという「悲しい前例」だ。 何として も第2のゴメリ・チェルノブイリにならないようにした い。こういう事実をもっと広く知らしめてほしい。事故 がおこるまで原発に反対しなかった自分がバカだった。く やまれる。(50代女性)◆「困難の中の子どもちへ希望を」 代表ポホモワ・ワレンチーナ、オリガ親子の厳しい現実 と闘いながら将来への希望をあきらめない力強い姿勢に 感動した。そして自分のような孤独な人を作らない温か い気持ちに胸が熱くなった。チェルノブイリ汚染地の医 師が言った言葉が心に響いている。「フクシマの子がチェ ルノブイリの悲劇をくり返してほしくない」と。フクシマ の子がこれから病気で苦しむのを少しでもおさえられる よう、病気の子がなるべく少なくなるよう私たちに今出来 ることは何か?国民全体で考える時だと思う。(50代女 性)◆保養所の存在とその重要性について知ることができ て良かった。今までその存在についてすら知らなかっ た。富塚くんのスピーチがとても良かった。「火力発電は お金がかかると言うけれど、命の方が大事じゃないんで すか?」まさにその通りだと思います。そんな当たり前の ことを、きちんと発言して行動できる国になるよう、自 分でも微力ながらできることに取り組みます。ありがと うございました。(30代女性)◆チェルノブイリで起きた ことまだ現在も続いている被害の現状を知り、今後私がや っていかなければならないことが良く分かりました。こ のような機会をもうけてくださり、また、貴重なお話を聞 かせていただき、ありがとうございました。(20代 男性) ◆ワレンチーナさん、オリガさん共にチェルノブイリ事 故から大変な思いをしながらもあきらめずに前向きに生 きている姿勢に頭が下がりました。武藤類子さん、富塚 悠使君、広河隆一さんの生の声を聞き、他人事ではな く、勉強をし、自分のできる範囲内で協力ができたらと 思います。きちんとした情報、真実をみる目を失ってはい けないなと思います。(50代)◆チェルノブイリの被害が 後の世代へ継がれてしまうことの恐さを知った。現在の 福島の現状を「自分」で知りたいと思った。(20代 女性)◆ ポホモワさんの報告、講演がとても感動的でした。チェル ノブイリ原発事故からの継続的な支援活動に感銘を受け ました。(60代 男性)

(チェルノブイリの歌声は19頁にも掲載)

募金・救援状況

⋑募金状況 2012年3月~ 5月

(単位:円)

	3 月	4 月	5 月
募金件数	140 件	229 件	96 件
救援寄付金	453,060	595,327	719,340
保養費	140,375	54,500	44,500
特別保養費	175,000	71,000	_
里子支援	43,380	34,730	65,700
医療機器支援	13,000	_	_
ニュース購読費	62,000	76,000	38,000
26 周年イベント賛同金	135,000	140,000	14,000
合計	1,021,815	971,557	881,540

☆ほかに現物寄付としてベルマーク、切手 2, 120 円2	分
●救援状況 2012 年 3 月~ 5 月	(単位:円)
<ウクライナ>	
シテフォルク・ミーシャ支援(治療代)	202,350
ホミチ・ウラディスラフ支援(手術代)	1,560,600
◎子どもたちの生存	
特別保養費	998,280
<ベラル ー シ>	
◎希望 21	
保養費(2012年後期分)	2,023,500
特別保養費(家族の保養、子どもの保養前期	878,150
分)	676,130
医薬品	1,085,795
コンピュータ、備品	625,833
◎困難の中の子どもたちへ希望を	
特別保養費(家族の保養バス代)	47,817

運営費(車修理費) 49,158 奨学生1人 24,579 ◎チェルノブイリのサイン 里子支援 4 人('12.7~12 月分) 98.316

医薬品 40.965 運営費(通信費、スタッフ給料) 63,905

學 募金団体名一覧 ♥(順不同·敬称略)

~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~ * ~

紙面の都合上、個人名は省略させていただいております。 ご寄付をいただいたみなさまに心より感謝申し上げます。

【3 月】トランスフェリックマネジメント/まほろば/一戸南 小学校 児童会/広河隆一非核・平和写真展開催を 支援する会/ACT21/KATO 企画/東用堂治療院 /日本キリスト教団 片倉教会教会学校/ピースライ ブインこうち/東京ピースフィルム倶楽部/スペース nana /(株)ジョイメイト

【4 月】トランスフェリックマネジメント/北陸学院中学校 宗教委員会/カトリック徳田教会/(株)ジョイメイト/ 小池音楽教室/栃木県立小山高校 ユネスコ部/ 照恩寺/アウシュヴィッツ平和博物館/みえ 426 の会 /リサイクルグループ カリーナ/ケイ歯科クリニック

【5 月】トランスフェリックマネジメント/横浜長老教会/ (株)ジョイメイト/

チェルノブイリ 26 周年救援キャンペーン 「チェルノブイリと福島」講演会・写真展

講演会・写真展とも多くの方にご来場、ご協力いただ きましたことお礼申し上げます。

募金額 237,028円

募金額より半額の 118,514 円ずつをチェルノブイリ の子どもたちと、《未来の福島こども基金》を通し福 島の子どもたちへの支援として大切に使わせていた だきます。イベントの収支については下記のとおりで す。

チェルノブイリ26周年救援キャンペーン 収支報告					
収入		支出			
資料代	450,500	講演会			
賛同金	299,000	会場費	52,178		
会場募金	94,664	舞台費	30,000		
物販益	103,837	ゲスト滞在費・食費	98,259		
写真展募金	9,600	写真展			
		パネル利用料・送料	52,105		
		共通経費			
		交通費	272,310		
		印刷費	102,419		
		発送費	91,120		
		事務費	22,182		
小計	957,601	小計	720,573		
		募金	237,028		
合計	957,601	合計	957,601		

****チェルノブイリの歌声②****

※3 月に事務局の佐々木が東京都立中央ろう学校 にてチェルノブイリの講演を行ないました。

<講演後の感想・高校1年生>

◆今回、講演してくださった内容は福島の原子力発 電にも少し関係していたので、注意深く聞くことが できました。また、私はこの講演を聞くまではチェ ルノブイリ原子力発電については全く知りません でした。1番印象に残ったのは、チェルノブイリで 病気を持っている幼い子どもたちが日本は大丈 夫?と心配していた、ということです。遠い国なの に、近くにいるような感じがしました。◆チェルノ ブイリ原発事故は、今もウクライナやベラルーシの 人々を苦しめているということ、事故の規模の大き さや、ウラン・セシウム・プルトニウムの半減期に ついても知ることができた。印象に残ったことは、 事故の影響で病気になった子どもたちが、自分も大 変なのに日本の心配をしてくれていたことです。原 発の恐ろしさが分かったので日本も原子力発電を やめて、他の安全な発電方法を増やせるといいなと 思いました。

事務局から

■ボランティア募集

◎事務局では、毎月第1·3 土曜日の午後1 時半~5 時、ボランティアの方に事務作業などを手伝っていただいています。少しの時間でも歓迎です。

◎ニュース発送作業(年4回:3・6・9・12月)次回 日時:9/22(土)午後1時~4時頃まで場所:東京ボランティア市民活動センター

(飯田橋駅ビル セントラルプラザ 10 階)

◎日程が変更になる場合もありますので、ボランティア 参加希望の方は、前日までにご連絡ください。

【問い】平日午前 10 時~午後 5 時半 留守の場合は伝言をお願いします。 T&F 03-5228-2680

■「基金ニュース」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースレターをお送りしています。また、ニュースレター購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。

■振込用紙と領収証について

すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

<u>払込取扱票のお名前・ご住所は楷書でご記入ください</u> 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご 希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送りします。 振込用紙の該当欄に印をつけてください。

「領収証」が必要な方へ

郵便局払込取扱票の「払込受領証」は公に認められる 領収証です。大切に保管ください。別途領収書がご入り 用の際はお申し出ください。

- ※ご不明な点がございましたら問い合わせください。
- ★里親のページ、黒部ドクターのお話、それぞれ誌 面の都合により、休載します。

●訂正のお願い●

別紙チラシ"未来の福島こども基金の総会案内"の場所 が違っていました。正しくは下記のとおりです。 誤)池袋区民センター →正)豊島区民センター

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年4回発行● 〒162-0816 東京都新宿区白銀町 25 メゾンド原 207 号 Tel/Fax 03-5228-2680

HP http://www.smn.co.jp/cherno/index.html E-mail cherno1986@tokyo.email.ne.jp

神楽坂事務局だより(ブログ)

http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/ ※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象 とはなりません。ご了承ください。

緊急支援

ウクライナの二人について緊急支援を行いました。

H・ウラディスラフ 1996 年生まれ ウクライナ ジトーミル州オブルチ市

左腎臓の形成不全。4歳で左腎臓切除手術。右腎臓は機能不全。ウクライナで透析療法を受けていましたが病状が悪化。ドナーがみつかり、ベラルーシの病院で腎臓移植手術が予定されていました。昨年2月、子ども基金が保育器を支援した産院を訪問の際、看護師をしているこの子どもの母親タチヤナ(1974年生まれ)から支援要請がありました。手術費用40,000ドルのうち20,000ドルを寄付で集めたがまだ半分不足しているとのこと。そこで子ども基金は20,000ドルを支援しました。手術は4月中旬に無事終了、現在は自宅で療養中です。ウラディスラフの祖父はリクビダートルでした。脳腫瘍で死亡したそうです。

S・ミハイル(ミーシャ) 1981 年生まれ ウクライナ

前号では、抗がん剤費用支援の報告をしましたが、その後、その抗がん剤はウクライナでも、日本、フランスなどでも承認されていないため購入できないことがわかりました。ミーシャは今後の治療について、ウクライナのいくつもの病院に行きましたが、医師の言うことはみなそれぞれ違ったそうです。最終的には、キエフの病院で放射性ヨード治療を受けることに決め、5月下旬に治療を受けました。子ども基金は治療費用 2500 ドルを支援しました。

≪ミーシャからの手紙≫私は退院して自宅にいます。ョウ 素剤による治療を終えました。治療は大変でとても辛かっ たです。心臓に大きな負担となり、病院では足首がむくみ、 ほぼずっと眠ることができませんでした。しかし幸運にも子 ども基金の支援のおかげで乗り越えることができました。 結果を待つのみです。医者の話では、1ヵ月後に分析結 果がわかるそうです。分析結果で全てが明らかになります が、左の片側と左の首のあたりがヨウ素治療の前よりもむく みが取れてきています。つまり何らかの効果があったとい うことです。ただ依然として、だるさと不眠症が続いていま す。しかし、じきに良くなると思います。薬代の金額は最初 に言われた額よりも安くすみました。支援していただいた お金から入院費用の500フリヴニャも支払いました。あらた に抗腫瘍剤を処方されました。数ヶ月服用する必要があり ます。病気と闘って体によい影響を与える薬です。特に呼 吸を正常にしてくれます。薬代のレシートと病院の証明書 を添付します。分析結果が出て、X線検査が終わったら、 すぐにお知らせします。

感謝をこめて。ミーシャ